市指定史跡

番の面遺跡

番の面遺跡は、梓河内と柏原の境にあたる、霊仙山と清滝山にはさまれた峡谷部の台地上にあります。昭和29年、畑の開墾で縄文土器の破片30数個が出土しました。京都大学考古学教室で鑑定がおこなわれ、京都学芸大学により昭和30年７月に発掘調査がおこなわれました。このときの調査の最も大きな成果は、近畿地方ではじめて縄文時代の竪穴住居跡が見つかったことで、一躍、番の面遺跡を有名にしました。また、土器はこの地域を代表するものとして「番の面式」と名付けられました。住居跡は、長野県や岐阜県で見つかっているものと構造が似ています。土器も東日本的なもので、番の面遺跡が信濃・飛騨・美濃等との文化的交流をもとに成立していることがわかりました。

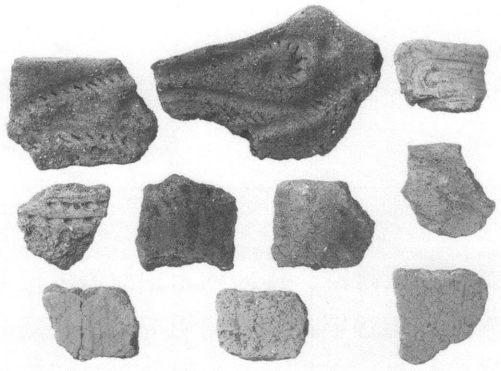
さて、梓河内の個人宅には、昭和30年以降、遺跡で拾われた石器が約320点保管されています。そのほとんどが矢の先に取り付ける石鏃で、石材は青色・黄色・白色、透明・不透明などカラフルな色のチャートです。大きさや形から細かく八種類に分類できます。わずかな調査面積にもかかわらず、これだけ多量の石鏃が出土している遺跡は県内には見当たりません。実は、遺跡の近くに良質のチャートの露頭があり、番の面の縄文人はこの石材を利用して石鏃を作り、周辺の村々に供給していたのです。遺跡から石鏃を作ったときのクズが見つかっていることからも、ここが石器作りのムラだったことがわかります。

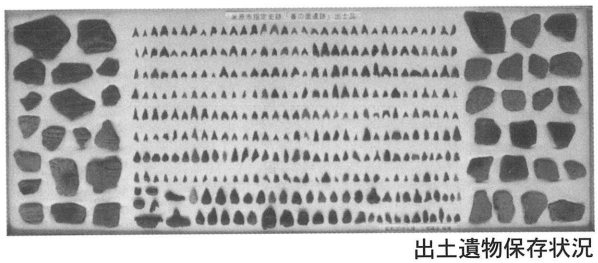
採集された石鏃（個人蔵）

平成22年度 埋蔵文化財活用事業

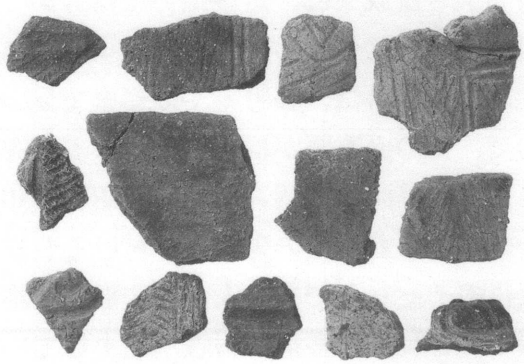
東日本との文化交流の地

遺跡がある台地は番の山とよばれ、いまでは名神高速道路と国道21号線によって分断されています。交通網が集中するこの地は、古代の三つの関所のひとつである不破関（ふわのせき）がすぐ近くにあります。近世には中山道を通り、不破関をぬけた最初の宿場町が柏原で、柏原は日本海地方に至る北国脇往還（ほっこくわきおうかん）にも分岐します。西へは醒井をぬけて、琵琶湖岸の朝妻から湖上ルートを利用して畿内へ入る経路がありました。このように、主要街道の門戸的な位置にあたり、東西文化の接点として、また政治上、戦略上、常に重要な位置を占めてきました。これは、縄文時代から始まっていることが、番の面遺跡の調査から見えてきました。





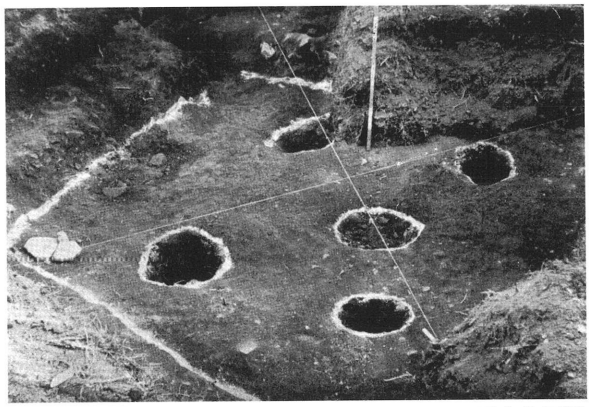
出土遺物保存状況



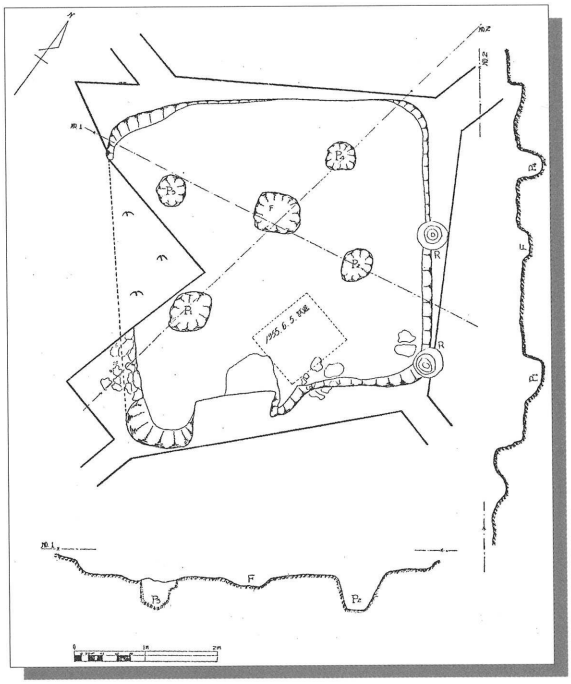
縄文土器（個人蔵）

竪穴住居跡現状

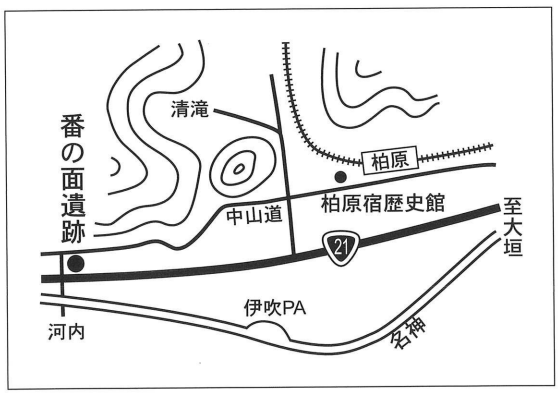
遺跡遠景



竪穴住居跡



竪穴住居跡実測図（昭和29年調査）



番の面遺跡

■ 所 在 地　　滋賀県米原市梓河内・柏原

■ アクセス　　JR東海道線柏原駅下車。徒歩約45分。

米原市教育委員会

滋賀県米原市顔戸281-1　近江はにわ館内

TEL.0749-52-8025　　FAX.0749-52-8177

平成22年度 埋蔵文化財活用事業